

## 2021年9月12日（日）主日朝礼拝説教

『主の業を知らない世代』 井上隆晶牧師  
士師記2章8～14、16～19節、詩編40篇6～12節

### ①【主を知らない民】

今日は旧約聖書の士師記からお話をします。イスラエルの民はエジプトで400年間奴隷の生活をしていましたが、モーセに率いられて脱出し、彼らに約束されていた土地（現在のパレスチナ地方）に戻ってきました。そこにはカナン人といわれる原住民たちが住んでいました。神はモーセの後継者であるヨシュアにその土地を戦いによって手に入れるようにいわれます。ヨシュアに率いられたイスラエルの民は多くの戦いを繰り返して土地を手に入れ、その土地は12の部族に分けられました。やがてヨシュアも戦った多くのイスラエルの民も歳を取って死に、次の新しい世代になります。その新しい世代の時に現れた指導者たちを「士師（しし）」といいます。彼らは王様ではなく、預言者であったり、女性であったり、英雄であったりします。有名な人としては怪力の持ち主サムソン、女預言者デホラ、勇者ギデオンなどがあげられるでしょう。

今日の個所2章10節に「その後、主を知らず、主がイスラエルに行われた御業も知らない別の世代が興った」と書かれています。「主を知らず」といっても、父や母から、あるいは祖父母や教師たちから、神様が荒野でどんなに多くの奇跡を起こし、イスラエルの民を顧みて下さったかという話しや証しを聞いていたに違いないのです。その意味では彼らは決して主を知らない人たちではありませんでした。ただ彼らは頭では知っているのですが、自分の体験として知らなかったということでしょう。他人に現れた神の栄光は知っていても、自分に現れた神を拝したことがなかったのです。そこに彼らの弱さがありました。証しとは「神があなたにどんなに大きなことをして下さったか、語り聞かせなさい」（ルカ8：39・口語訳）と主が言われたように、私にして下さった神の業を語ることです。もし私たちが自分の中にこうした証しを持っていないとすれば、私たちもまた士師時代のイスラエルの人々のように「主を知らない民」になるのです。これは現代の私たちへの警告でしょう。

ではなぜ彼らは神を体験できなかったのでしょうか。それは神の言葉を自分への語りかけとして聞けなかったからです。一般論として聞いたり、聞いても従わなかったからです。詩編の40篇7～8に「あなたはいけにえも、穀物の供え物も望まず、焼き尽くす供え物も、罪の代償の供え物も求めず、ただ、私の耳を開いて下さいました。そこで私は申します。ご覧ください、私が来ております。私のことは巻物に記されています。」とあります。これはイエス様が、自分がメシアであると悟った個所だといわれています。イエス様は「ああ、これは自分の事だ」と聞く耳を持ってらっしゃった。ここが私たち凡人とイエス様の違いです。聖書の言葉をいつも自分への語り掛けとして聞き、まずは従う者となりましょう。

## ②【ひとりの信仰者によって多くの方は守られている】

体験のない新しい世代はやがて信仰を失い、神の戒めから離れて行き偶像に仕えるようになりました。そこで神は彼らに災いを与え、周りの敵が彼らを苦しめるようにされました。彼らは苦しくなると神の名を呼んで祈りました。すると神は士師を立ててイスラエルの民を救いますが、士師たちが死ぬと、また元に戻ってしまったようです。聖書は「士師の存命中は敵の手から救って下さった」（士師記 2：18）と書かれています。この一人の信仰者によって多くの方が赦され、守られるということがあるということです。よく「あの家は誰々さんによって支えられている、あの人が死んだらもう駄目だろうな」と言われることがあります。それと同じです。ごく僅かの本当の信仰者が世界を支えています。ソドムとゴモラの町が滅びないようにアブラハムが祈ったことを思い出してください。神様から「その 10 人のために私は滅ぼさない」という約束を出させました。（創世記 18：16 以下）「この 10 人の一人にあなたもなりなさい」と言われているのではないのでしょうか。

## ③【信仰生活は戦いであること】

今日は読みませんでしたが 3 章を読むとこう書いています。「カナン人とのいかなる戦いも知らないイスラエルとそのすべての者を試みるために用いようとして、主がとどませた諸国の民は以下のとおりである。そうさせたのは、ただ以前に戦いを知ることがなかったということで、そのイスラエルの人々の世代に戦いを学ばせるためにほかならなかった。」（3：1～2）「戦いも知らない」「戦いを知ることがなかった」「戦いを学ばせるため」と三回も戦いという言葉が出てきます。この新しい世代の人たちは「戦いを知らない世代」だったので、戦いを学ばせるために、神はあえて原住民を追い出さなかったということです。目の前にさまざまな問題が起こって来るのは、私たちに信仰の戦いを教えるためです。この問題を信仰をもって解決するのか、つまり神に祈って解決するのか、それとも問題に押しつぶされて人のせいにしていじけて生きるのか、を試されているのです。

●私は今まで戦って信仰とすべてのものを手に入ってきました。カルトと戦い、みなさんを手に入れました。悪霊と戦い、聖霊がくだって人を変えて下さいました。礼拝堂を改装するのも戦いでした。恐れとの戦いでした。戦うことによってたくさん神の奇跡を見てきました。戦う者には、神が現れてくださり、神が共におられるという助けとするしを見せて下さいます。だから戦う者は神を知り、神の不思議な業を知っていますが、戦わない者は神を知りません。

約束の土地を手に入れる物語とは、私たちの心の中に起こっている話だと思えばいいのです。イスラエルの民は約束の土地を手に入れるのにとっても時間がかかり、遠回りをします。それは人の心の中に平和な神の国が実現するには時間がかかるということなのです。「神の国は飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです。」（ローマ 14：17）とパウロも言っています。

士師記 1 章を読むと「追い出さなかった」、「占領しなかった」という言葉が七回ほど繰り返されています。私たちの心の中から追い出さなければならないものがあるのです。「怒り、妬み、恨み、不信、裁き、敵意、仲間争い、絶望、偶像、淫乱、貪欲など」の心を追い出さなければなりません。そうでなければそれらに逆に心が支配されるでしょう。これらの悪を自分の力で支配し、コントロールしようと思ってはなりません。それは決してできません。聖書が教えているのは、信仰による戦いであって、神の言葉に従うことによって追い出すという霊的な戦いなのです。奪われても奪い返さない、敵を愛し、迫害する者のために祈るという戦いです。赦せない人を赦す戦いです。信じることは信じないこととの戦いです。聖霊の力によらなければそれらの悪い心を支配することも、心から追い出すことも決してできません。だから祈るのです。

第2次世界大戦で戦死したソビエト兵士の祈りがあります。

●神よ、聞いてほしい。自分はこれまで一度も、あなたに語ったことはなかった。でも今日、僕はあなたに語りかけたいと思う。知っての通り、子どもの時から「神など存在しない」と言われ続けて、僕は大きくなりました。そして、愚かにもそれをまともに信じてきたのです。これまで、あなたの造った被造物に目を注いだことはありませんでした。でも今晚、塹壕の中から、僕は天を見上げてみました。頭上に光る星空。僕はそのままゆさに驚いた。そして、その時、一瞬にして僕は分かったのです。一つの嘘が、どれほど残酷なものになりえるかって。自分にはわからない。でも神よ、あなたは僕に御手をのばしてくれますか。こんな地獄の真ん中で、僕があなたを知るに至ったということ。そして、その光を見たということ。これは実に驚くべきことではないでしょうか。それが僕の打ち明けたかったことです。

それからあともう一つ。あなたを知ることができて、僕はうれしかった。今晚、僕たちの部隊は前線に出ます。でも今ふしぎに、怖くないのです。あなたが僕たちを見ておられるのだと思います。あ、指令が来ました。もう行かなくて。あなたと話せて本当によかった。

知っての通り、戦火は激しくなる一方で、もしかしたら、今晚にも僕は、あなたの戸をノックすることになるかもしれません。これまで一度も私はあなたを友としてきませんでした。それでも、僕を受け入れてくれますか。

今、僕は泣いています。おお、わが神よ。そして僕の目はあなたの光を見ています。さようなら。もう行かなくては、、そして、僕はもう二度と、戻ってこないでしょう。でも不思議です。今、僕の中で、死に対する恐怖がまったくないのです。

渡辺和子シスターはこの詩についてこう書いています。「作者もわかっていないこの詩を一読して、私は心打たれました。神を知ったがゆえに、心に平安を得たこの兵士は、その夜、神のふところに温かく抱きとられたことでしょう。神は無関

心であった者にこそ、いつも愛に溢れた関心を寄せているからなのです。…神の存在を感じた時、誰でも心おだやかに過ごすことが許されるのです。」彼の心の中を神の愛が支配した瞬間だったのだと思います。神の支配は、心に平安を与え、恐れを取り去ってくれます。私たちもいつも心を神の愛で支配してもらいたいと思います。